

# 集団球技における運動形式の捉え方について

## —バスケットボールを事例にして—

松本 真\*

キーワード：運動形式、バスケットボール、全体像

### 1. 序論

#### 1.1 動機・目的

バスケットボール型の球技がどのように考えられてきたのか、先の拙者の論文<sup>1</sup>にて、この種の球技を全体として捉える運動形式を理論的に想定し、さらに、その存在の可能性に言及した。そこで、本論文では、このような運動形式をこれまで、どのように捉えられてきたのかということ概観し、分析する。そして、今後の方向性の指針を探る。

#### 1.2 本論の進め方

本論では、バスケットボールを同じような種類の集団球技の代表的なモデルと考えている。

バスケットボールを取りあげるにあたり、日本バスケットボール協会が指導者のための出版物を出している指導書があるので、それを主要な分析対象とする。その中でも代表的なものに、「エンデバープロジェクト」に関わる出版物、公刊物がある。本論では、このエンデバーに関わり、日本バスケットボール協会が出版している書物を対象とする。後で触れることにはなるが、このエンデバーは、「ジャパン・オリジナルの実現へ」という意図が前面に出ているから

であり、そこには、ジャパンという限定がつくからには、一つの思想、主張に基づいた形式が存在すると考えているからである。また、日本バスケットボール協会が、出しているということは、少なくとも、日本におけるバスケットボールにおける運動形式の集大成であり、また、これからの基礎となるものと考えられる。このような理由から「エンデバープロジェクト」に関わるものを分析の対象とし、日本におけるバスケットボールの運動形式、特に、バスケットボール全体の運動形式を探り出していく。

#### 1.3 エンデバープロジェクトの概要と背景

日本バスケットボール協会によるエンデバープロジェクト (ENDEAVOR PROJECT) は、日本におけるバスケットボールの普及、強化を目的としたものであり、そのための方策として、一貫指導システムによる「ジャパン・オリジナル・バスケットボール」の実現が、目指されている。

このプロジェクトは、平成12年9月策定の文部科学省「スポーツ振興基本計画」における、国際競技力の総合的な向上方策を基盤とした「JOCゴールドプラン」に対する日本バスケットボール協会の具体的な取り組みである。その中でもエンデバープロジェクトが重きを置いているのが、一貫指導システムの構築である。バ

\* 埼玉大学教育学部保健体育講座

スケッチボールを取り巻く環境は、以前よりも厳しさを増してきて、かつてのような実業団を頂点とした強化システムが崩壊しつつあること。専門的な知識を持った指導者が以前よりも求められるようになったこと。そして、最も大きな理由として、バスケットボールの競技特性と日本人の基本的な体格にあります。つまり、体格という観点から考えると、305cm上にあるゴールを目指すバスケットボールには、日本人は不向きであり、いかにこのハンデを克服するのかが、日本バスケットボールの永遠の課題であり、この課題に挑戦しようとする時に、一貫指導システムに活路を見出そうとしているのです。エンデバープロジェクトを概観するとこのような背景があることがわかる。

さて、この一貫指導システムには、「ジャパン・オリジナル・バスケットボール」の構築が前提となっている。本論では、その内容について書かれた指導書分析する。

## 2. 本論

### 2.1 指導書の全体像について

現在、エンデバープロジェクトを具体化するための指導書として、日本バスケットボール協会は、シリーズ物として三冊の刊行物を出版している。

「エンデバーのためのバスケットボールドリル  
～選手育成とジャパン・オリジナル実現への  
手引き～」

「エンデバーのためのバスケットボールドリル  
2 ～1対1から始める5対5への基礎作り  
～」

「エンデバーのためのバスケットボールドリル  
3」<sup>2</sup>

最初に、この三冊の全体像をみるためにそれぞれの指導書がどのような目的が書かれているのかを、「発刊に際して」、「本書のねらい」、そ

して、「目次」を検討する。

シリーズ一巻目の「エンデバーのためのバスケットボールドリル ～選手育成とジャパン・オリジナル実現への手引き～」の「発刊に際して」を検討する。

まず、日本のバスケットボールの現状について触れている。「日本のバスケットボール界に目を向けますと、残念ながら、世界の強豪国、アジアのライバル国に遅れを取り、徐々に水を開けられつつあるのが現状です。私たちが、ぜひともその差を埋め、『強い日本』、『世界で活躍できる日本』となるよう、また、将来を背負う若いプレーヤーや指導者に夢と希望を与えることのできる日本バスケットボール界となるよう、真摯にこの現状と向き合い、様々な課題を克服していかなければなりません」<sup>3</sup>とある。日本のバスケットボール界が、世界の中で勝負していくために、現状のままでは、衰退の一途であるとの認識を示している。その上で、「2002年に、日本バスケットボール協会では尾崎正敏・前会長の下、『JABBA変革21』という提言とともに、『中長期計画～20年構想～』という将来の発展へつなげるための計画を発表…中略…『強い日本』、『世界で活躍できる日本』の実現のためには、ある特定のプレーヤーや指導者だけでなく、バスケットボールに取り組むすべてのプレーヤーと指導者にその理念や正しいスキルを普及させ、全体的な底上げと育成が必須という考えを基に、エンデバー制度など、新しい取り組みが立ち上がり、広くその活動が行われるようになってきました。本書のその一環として発刊される」<sup>4</sup>ものとしている。つまり、上記の現状認識に対して、単なるトップレベルの選手の強化ではなく、バスケットボール界全体の発展を目論むものであり、そのための、基本となるものとして、エンデバー制度などがあることがわかる。

「本書の狙い」では、「『JABBA変革21』が発表され、3年目を迎え…中略…エンデバー委員会では、皆様との積極的な意見交換なども

行いながら、最終的に『世界へ出て、活躍し、勝てる強い日本』を実現させるためのいくつかのテーマと取り組んでいます。その主なものが、『①オリジナル・バスケットボールの構築と普及の実現、②指針に基づいたプレーヤーの一貫指導の実現、③世界に通じるプレーヤーの発掘と育成・強化の実現、さらに④指導者育成の実現』<sup>5</sup>としている。その上で、「オリンピックや世界選手権に日本の代表チームが常時出場できるようになることはもちろん、『ジャパン・オリジナル』な戦い方を駆使し、世界から目を見張られる戦いを繰り広げることにあります。そして、20年後には、これらの国際大会において入賞、メダル獲得を狙うことのできる実力を持った日本代表を編成し、以降もその実力を継続するための環境を作っていくこ…中略…これまで以上に幅広く普及活動を行い、また全てのプレーヤー・指導者の育成に力を注ぐことが求められます。それに対して、…中略…実際にプレーヤーを指導される、全国の指導者の皆様のご理解とご協力が不可欠」<sup>6</sup>としている。このねらいの中の大きなポイントは、オリジナル・バスケットボールに構築とそれを基にした一貫指導システムの構築、普及にあると考えてよい。

目次に関しては、以下のようにになっている。

第1章	オリジナル論とゲーム・クラシフィケーション
第2章	ストップ&ステップに関するドリル
第3章	シューティングに関するドリル
第4章	ドリブルに関するドリル
第5章	パッシングに関するドリル
第6章	U-12の育成・指導に関するドリル <sup>7</sup>

となっており、第1章、第6章以外は、最も基本的なバスケットボールの個人スキルについての内容になっている。

シリーズ二巻目の、「エンデバーのためのバ

スケットボールドリル2 ～1対1から始める5対5への基礎作り～」を検討する。

まず、「発刊に際して」は、「本書は、その名の通り、この『エンデバーのためのバスケットボールドリル』の続編（第2巻）として発刊する」<sup>8</sup>とあるように、基本的な趣旨、理念を引き継いでいる。

「本書の狙い」においては、上記の通り基本的な理念を引き継ぎながら、「エンデバーのためのバスケットボールドリル」での個人のオフENSEスキルを受け、「オフENSEに対する個人のディフェンス・スキル、1対1の攻防から、最終的には戦術・戦略が大きく関わってくる5対5の攻防の一步前の段階、4対4での攻防までの指針・見解を示し、育成ドリルの一例を提示していきたい」<sup>9</sup>と基本的な方針を示している。その上で、「基礎・基本の習得の重要性を十分に認識し、それを前提としつつ、ジャパン・オリジナル・バスケットボールの展開のために、一部その範疇を超えた内容にも触れている場合があります。その点は、プレーヤーのレベル等にも配慮の上、指針・見解をご参照いただきながら、指導・育成の一助に」<sup>10</sup>とあるように、ジャパン・オリジナル・バスケットボールを念頭に書かれている。

目次については、以下のようにになっている。

第1章	1対1の攻防（マンツーマン・ディフェンスの基礎）に関するドリル
第2章	2対2の攻防に関するドリル
第3章	リバウンドに関するドリル
第4章	3対3の攻防に関するドリル
第5章	4対4の攻防に関するドリル
第6章	U-12の育成・指導に関するドリル <sup>11</sup>

となっている。

シリーズ最後の「エンデバーのためのバスケットボールドリル3」を検討する。

「発刊に際して」「本書の狙い」は基本的にこ

れまでの内容を継続している。ただ、「本書の狙い」において、『『エンデバー 1』ならびに『エンデバー 2』にて紹介した内容をすべて引き継ぎながら、ジャパン・オリジナル・バスケットボールの構築において、特に大きなテーマとして掲げられているトランジション・プレーを中心に、指針や見解、および育成ドリルの一例を提示していく … 中略 … また同時に、5対5における戦術・戦略についても取り上げ]<sup>12</sup>ているとある。

目次については、以下のようになっている。

- 第1章 トランジション・プレーに関する総論と準備
- 第2章 アウトレット・プレーに関するドリル
- 第3章 ファーストブレイクの展開に関するドリル
- 第4章 セカンダリーブレイク～アーリー・オフENSEの展開に関するドリル
- 第5章 オフENSEからディフェンスへの展開に関するドリル
- 第6章 オールコート・プレス・ディフェンスに関するドリル<sup>13</sup>

となっている。基本的には、オールコートへ展開する戦術について書かれている。

## 2.2 ジャパン・オリジナル・バスケットボール構築の中身について

上記のような検討を踏まえ、バスケットボールの全体像の運動形式ということを見ると、キーワードとなりそうなのが、ジャパン・オリジナル・バスケットボールである。エンデバーに関する三冊の指導書の狙いの一つであるし、また、一貫指導システムの構築の前提にあるキーワードでもあることが伺える。そこで、このジャパン・オリジナル・バスケットボールの中身についてさらに検討をしてみる。

ジャパン・オリジナル・バスケットボールに

ついては、「エンデバーのためのバスケットボールドリル ～選手育成とジャパン・オリジナル実現への手引き～」の中の「第1章 オリジナル論とゲーム・クラシフィケーション」に触れているので、検討してみる。

この章の中の最初に、オリジナル・バスケットボール論と題し、ここで扱うオリジナルについて言及している。まず、日本バスケットボールの現状について『『走力、敏捷性、スピードを最大限に活かした、平面的で、ハイペースなバスケットボール』で戦ってきました。小さくとも、組織的で変幻自在なディフェンス、オフENSEにおいては、スピーディな展開から高い成功率を誇るアウトサイド・シュートは大きな武器であり、今後も変わらず日本の基盤<sup>14</sup>となるとしている。歴史的に日本が世界と戦うために、実践してきたバスケットボールの基本的なコンセプトである。しかし、これらのコンセプトは、ジャンパン・オリジナルとは言いがたく、身体的なハンディがある、身体能力の劣るバスケットボールチームが行う王道的なものである。日本バスケットボール協会のエンデバープロジェクトも、この辺りを十分にふまえた上で、考察されていると思われる。それは、「特に24秒ルールの導入以降、ほかの多くのチームが、同様のスタイルに取り組み始め … 中略 … 私たち以上の高さや速さを併せ持つことが世界のスタンダードになりつつある今、同じスタイルを、同じようにプレーすれば、残念ながら勝機は少ない<sup>15</sup>という部分に現れている。さて、このような現状認識の上で、このエンデバープロジェクトは、「日本はさらなる高さや速さを他チームと同様に求めつつも、同時にそこでの不利を覆すためのプラス $\alpha$ を求めていかなければ、世界に伍して戦うことはできない … 中略 … そのプラス $\alpha$ こそ日本が見出し、追求すべき『オリジナル』<sup>16</sup>としている。エンデバープロジェクトの中でたびたび出てくるオリジナルという言葉の意味と方向性がここに示されている。バスケットボールの日本における

全体の運動形式のコンセプトはここにあると考えられる。特に、新しい部分にだけ目を向けている訳ではなく、歴史的な観点を十分にふまえている点は、後述する運動形式の基本的な性質とも合致するものである。

さて、この「オリジナル」の中身について触れているので、概観してみたい。そこには、「バスケットボールをただプレーするのではなく、『一瞬でも速く、少し（半歩、1cm、1mm）でもいいポジションを取り、高確率で、高い質で』プレーすることを深く追求していくこと、つまり、一つひとつのプレー、瞬間瞬間の勝負で小さな（ミクロの）勝利を重ねていくことで、試合全体（マクロ）の勝機を見出していく」<sup>17</sup>のであり、そして、『合理的で効率の良いバスケットボール』を実現することこそ、私たちの望む、世界やアジアの中における『スマート（賢く）で、華麗な』バスケットボールの展開につながっていく<sup>18</sup>としている。ジャパン・オリジナル・バスケットボールの骨子はこのような表現されていると考えられる。ここで、ジャパン・オリジナル・バスケットボールに対するもう一つのキーワード「合理的で効率の良いバスケットボール」が出てくる。さらに、もう一つ、「日本人は、あらゆる点において、『頭脳的に、繊細・綿密に、そして熱心に』行動できることが特徴」<sup>19</sup>としてあげられ、これもジャパン・オリジナル・バスケットボールの大切な要素であるされている。最後に、「日本代表チームに限らず、すべてのチームは担当するコーチによって独自性が出てくることは当然です。しかし、その根幹となる合理的で効率の良いバスケットボールの実現には、ある一定の指針を基に、そのための基礎スキル、基礎理論が全てのプレーヤーに備わり、適切にプレーできるだけの判断力を有していることが必要」<sup>20</sup>としている。

ここまで検討すると、ジャパン・オリジナルというときに、先にも触れた「合理的で効率の良いバスケットボール」と日本人の特徴である

「頭脳的に、繊細・綿密に、そして熱心に」ということを根拠におきながらということになる。そして、チームスポーツであるので指導する指導者の特徴がチームに出ることは当然と考えながらも、日本人の特性を生かしたという一定の指針をよりどころにするということがジャパン・オリジナルの根幹となるとしている。

さらに、このシリーズ一冊目では、一貫指導に於ける各年代別要点をまとめ、そして、合理的で創造的なプレーヤーの育成ということに踏み込んでいる。その内訳は、①心の要素、②身体の要素、③基礎スキルの理解と習得（徹底）、④視野の確保、⑤状況判断と予測（「間」の重要性）⑥コミュニケーション<sup>21</sup>とある。運動形式に関わるのは、③から⑥までの項目であるが、③基礎スキルの理解と習得（徹底）は、個人のスキルについてのみ記述。④視野の確保は、全体の運動形式に関わりそうでありが、ボール・ポジション、ゴールとボールとの関係、見方と相手の様子、フローバランスとなっていてそれ以上の具体的な記述はない。また、⑤状況判断と予測（「間」の重要性）においては、目的意識と意思の確認とあり、「どういう理由で、何のために、どうしたいのか（どうすべきなのか）」を、常に確認して行動を決定するとある、さらに、具体的な記述として、「空間的」、「数的」、さらに「時間的」にどういう状況にあるのか随時判断し、より良いポジション、より良い行動を求める。選択した行動に対して、タイミングを計ること。自分の行動に対する他人の行動を予測し、それに対応するための準備をすること（3手先の読み）。などがある。一見、具体的に記述されているようであるが、バスケットボールの全体運動形式について記述しているとは、考えられない。少なくとも、この記述から、より良いポジション、より良い行動、タイミング、そして予測の具体的な内容は不明であり、それを含めたジャパン・オリジナルの全体像をイメージすることは難しい。

次に、ゲーム・クラシフィケーション

(GAME CLASSIFICATION) という項目がある。ここでは、「ゲームに必要な考え方やスキル等についての分類、あるいは構造と考えれば良い」<sup>22</sup>とある。この内容としては、例えばとして、「試合や練習中のある事柄からその原因を追及し、改善しようとするとき、… 中略 … 現在の位置からその前後（前段階に対する反省や次の段階への発展）、あるいはその状況（スキル等）に対する左右（配列）の関係、連携などを考えるための『道しるべ』と言える」<sup>23</sup>としている。ゲーム全体像を考えるにあたっての基本的な考え方を示しているものであるが、これでもまだ運動形式を示す具体的な内容とは言えない。さらにこの項目を検討してみると、ゲームの構成について言及されている。その中で、ゲームにおける攻防の展開という項目において、ゲームのある程度具体的な構成について触れている。まず、ゲームの構成を以下のように八つに分類している。

- 1) オフェンス・トランジション
- 2) アーリー・オフェンス
- 3) ハーフコート・オフェンス
- 4) ルーズボール（オフェンス・リバウンド）
- 5) ディフェンス・トランジション
- 6) アーリー・ディフェンス
- 7) ハールコート・ディフェンス
- 8) ルーズボール（ディフェンス・リバウンド）<sup>24</sup>

当然のことながら、8)の次に起ることが1)という具合に、連続性を持っている。また、途中でミスプレーが起れば、順番通りというわけにはいかない。例えば、1) オフェンス・トランジション 2) アーリー・オフェンスという時に、何らかの形で、ボールを失えば、6) アーリー・ディフェンス 7) ハールコート・ディフェンスへと移行しなければならないという具合である。しかし、バスケットボールのゲーム構

成を明確化するのに、古くからある考え方である。この中で、どのようにゲームを進めるのかは、この段階では不明である。

次の段階として、プレーの展開という項目で、オフェンスの視点からの解説し、攻防の展開をさらに具体化している。そこでは、まず、「得点を取るためにはシュートを打つことが必要であり、つまり、その瞬間にボールを保持しているプレーヤー（ボールマン／オンボール・マン）のみに得点のチャンスがある」<sup>25</sup>という極めて基本的なことを確認し、続いてボールを持っていないオフボール・マンのプレーについてふれている。そして、オフボール・マンの動きとして、三つ上げている。

- ① その時点でシュートの権利を持つボールマンを助ける動きをする。
- ② 自分がボールマンとなるための動きをする。
- ③ 他のオフボール・マンがボールマンとなるのを助ける動きをする<sup>26</sup>。

個別な具体的な動きとして、オフボール・マンのスクリーン、各種カッティングなどをあげ、オフボール・マンもボールマンと同様の1対1をしなければならないとしている。そして、全体として、「ボールの有無にかかわらず、各プレーヤーがプレーしているそれぞれの1対1を全体として見たときに、チームプレーとしてのスペーシングとなり、またそのタイミングの合わせという要素が加わるなどすることで、2対2～5対5のチームプレーが形成されていく… 中略 … ボールマン、そしてオフボール・マンの瞬時の判断（状況判断、確率の判断等）を基に、その瞬間に優先されるべきプレーを的確に選択して行くことが、オフェンスの成功」<sup>27</sup>となるとしている。ここで、バスケットボールのオフェンスについての全体的な見解を一応示している。しかし、まだ、具体性、イメージがわくのかといったら少々異なるような気がする。つまり、オフボール・マンの動きが大

切であるとしながらも、どのように動くのか不明であるというように、具体性がないのである。

さらに、この指導書が、一案的なスキル等を紹介、解説するのではないと確認をしながら、「オリジナル・バスケットボールの実現に向けて、… 中略 … 本書の内容であるシュート、ドリブル、パス、そして、それらのつなぎのスキルに関し、今後、特に課題となるであろうスキルを列挙し」<sup>28</sup>て、この後に解説するとしています。また、指導者の目標として、「プレーヤーを指導する際に最も留意しなければならないのは、プレーヤー自身に気付かせ、意志を持ってプレーするように仕向ける」<sup>29</sup>ということであるとし、このことが前述の「合理的で創造的なプレーヤーの育成」につながるのではとしています。

この後、具体的なスキルを紹介しているが、その中で、全体の運動形式に関わりそうな記述（ここでは、ジャパン・オリジナル・バスケットボールの構築）に触れてみる。

ステップ&ストップに関する指針という項目の中のスリー・スレット<sup>30</sup>での構えの省略（無駄なステップの排除）に『構えてから攻めているは、チャンスが得にくい』のであれば、『構える前、つまりストップ&ステップの段階で攻めてしまう』こと、つまり、次の積極的な攻撃動作（シュート、ドリブル、パス）へ移行することを考えて<sup>31</sup>プレーしなければならないとしている。

シューティングに関する指針という項目については、止まった（ステイ）状態からのシュートは、身体的ハンディを持つ日本人には不利との考えから、「プレーヤーはステイすることなくスペースを見つけて動き回りながら、個人的にはステップのスキルなどを駆使し、またチームとしては、より良いスペースへ、タイミングの良いシュート・パスを送る努力をしながら、ディフェンスとのズレを作り出してシュートする」<sup>32</sup>ことが必要になるとしている。さらに、シューティングに技術についても、「ムービン

グでディフェンスを振り切る努力とともに、一瞬の間を逃さない、クイック・シュートのスキルを身につけ、その成功率を上げていく努力」<sup>33</sup>も必要であると言及している。それ以外にも高さのある相手に対するシュート・スキルに関する記述が続き、ジャパン・オリジナル・バスケットボールにとって重要な事項の一つであることが伺える。

ドリブルに関する指針においては、まず、前提条件としてジャパン・オリジナル・バスケットボールにおいて、ドリブルよりもパスを重視するという基本的な指針を示しながら、重要なスキルとして、「ボール・プロテクションの問題 … 中略 … 大きいプレーヤーといざ対峙してみると、その手足が長く、また懐が深く感じられ、思わぬタイミング、間合いからスティールの手が飛んでくる … 中略 … ディフェンスに隙を見せることなく、常にボールをプロテクトしながらプレーする」<sup>34</sup>ということが大切であるとしている。

パッシングに関する指針については、『『平面的でスピーディー』、『合理的で効率的』、そして『スマートで華麗』なオリジナル・バスケットボールの展開を実現させるためには、… 中略 … 速く、緻密なパスで、チームとして相手のディフェンスを揺さぶり、崩していくこと、そして、ドリブルよりもパスを優先させるという考え方」<sup>35</sup>をとる必要があるという前提から出発している。基本的なスキルを習得することを当たり前のこととしながら、『『相手は大きく、能力がある』』ということ … 中略 … 原則的、移動（ムービング）も自分たちより速ければ、腕も長いといことであり、対峙して防御できるエリアが、自分がパスを出せるエリアよりも大きくなる可能性が高い」<sup>36</sup>ということを踏まえ、三点の課題を出している。第一点目は、「隙を見逃さないスピード・パス、あるいはクイック・パスのスキルを高めること。そして同時にボール・プロテクションを高める … 中略 … ワンハンド・パスのスキルの向上」<sup>37</sup>をあげている。

第二点目は、「判断力の育成という面も含め、  
… 中略 … ビジョンを広く取りながらのパス能力の育成 … 中略 … チームメイトやディフェンスの動きの理論や約束事を理解し、さらに直前の状況から、次の動きを予測することから引き出されるノールック・パス能力の育成」<sup>38</sup>ということに触れている。状況判断、ビジョンの育成は、全体の運動形式に深く関わる事柄の可能性ある。最後は、「ストップ&ステップのスキルをうまく利用し … 中略 … ステップ・パスのスキルの向上と、そこから無駄足を踏むことなく次のカッティングへとつなげ、ギブ&ゴーを継続させるムービング・プレー、いわゆるパッシング・ゲーム」<sup>39</sup>の実現を目指しているとして、特に、走りながらのパスであるステップ・パスの重要性に触れている。この部分もバスケットボール全体の運動形式に関わる部分であると考えられるので、もう少し詳しく見てみる。パッシング・ゲームは、「すべてのレシーバーとなるチームメイトとの協調プレーであり、個々のスキル単体だけでなく、目的意識・意思の共有、タイミングの合わせといった課題にも同時に取り組まなければ … 中略 … ディフェンスの状況を判断した上でパス・スキルを選択するだけでなく、さらにはレシーバーがそのスペースに到達する時間を考えたパスの強さ（速さ）も選択しなければ … 中略 … どれだけ個人のパス・スキルが優れていても、この合わせの部分がかうまく機能しなければ、チームとしてのパッシング・ゲームは機能」<sup>40</sup>しないとしている。バスケットボールにおけるパッシング・ゲームの大切な要素について触れているが、全体の運動形式に触れているかということ、少し疑問が残る。少なくとも運動形式における具体性に欠けるところがあると考えられる。特に、パッシング・バスケットボールが個人個人のスキルだけでは、成立しないということを認識しているなら尚更具体性がないと考える。つまり、約束事が大切、目的意識・意思の共有が大切であるとしながら、具体的なやり方にまで踏み込んで

いないのである。

シリーズ二巻目においては、一巻目の内容を引き継ぎなら、1対1から順に5対5へ向けた攻防について触れている。当然のことながら、これまで通り、ジャパン・オリジナル・バスケットボールのこれまでのコンセプトは継承しているが、それ以外は、特にこれといったオリジナルに言及するような部分はなかった。

シリーズ三巻目は、トランジション・プレーについて記述されている。個々でいう、トランジション・プレートは、「ボールの保有権獲得（あるいは喪失）から、ファストブレイクやセカンダリーブレイク等による攻防を経て、-halfコートバスケットボールへと移行」<sup>41</sup>するまでの一連のプレーのことである。そして、ジャパン・オリジナル・バスケットボールの構築のために、このトランジション・プレーのレベルを高め、アップ&ダウンの激しい攻防を目指すとしている。まず、ここでは、このアップ&ダウンの激しい攻防の長所、短所について言及している。長所として、「平面的で広い空間を使い、スピードを強調することによって、アウトナンバー、あるいはそれに準ずる有利な状況を形成できる可能性が高まり」<sup>42</sup>としています。つまり、より速く攻撃することで、高さの不利さを軽減させようとするものである。特に、高さで問題となるのが、リバウンド、その中でも直接失点につながるオフense・リバウンドを相手にとらせない戦略としてこの攻防があるという。仮に、ディフェンス・リバウンドを取られたときに、速い攻めがあると考えたときに、オフense・リバウンドに行くことよりも、いち早く戻って、速い攻めに備えてくれると、結果的に、オフense・リバウンドが手薄になるという考え方である。短所についても触れている。それは、「オフenseにおいてもディフェンスにおいてもミスを犯しやすく、ターンオーバーやファウルの多い乱戦になる可能性を否定

できない … 中略 … 得点することだけに意識が傾き、ディフェンスを疎かにするような、荒く雑なゲームになってしまう … 中略 … そうなってしまうえば、ゲームのテンポをコントロール・修正することが非常に難しく、アップ&ダウンが激しければ激しいほど、ゲームが悪い方に大きく傾く危険性が<sup>43</sup>あるとして、短所を指摘している。当然のことながらこれは、長所と表裏一体にあることである。そして、この書において、実効性を高めるためにはとして、以下のような指摘をしている。それは、『創造的・臨機応変・変幻自在』なプレーを目指し、『ビジョン』、『瞬間の状況判断』、『駆け引き』の育成・向上や『プレーヤーの目的意識・意思』の重要性を常に強調し … 中略 … 同時に、プレーにおいても理論においても細かなものから目に向け、基礎・基本、そして1対1から確実に積み重ねることこそ、プレーヤーやチームの育成において真に重要である … 中略 … プレーに参加するプレーヤーの数が増え、プレーが高度化・複雑化するほど、要所で原点に立ち返ること … 中略 … 指導者はプレーヤーに対し、フォーメーションを植え付けるのではなく、プレーヤー自身が判断し選択することを、そして、積み重ねによってプレーが成立・成功するように求め、指導<sup>44</sup>することが大切であるとしている。これ以降は、アップ&ダウンの激しい攻防についてのドリルの紹介と基本的な考え方が紹介されている。その一つが、「身体的・能力に不利を持つ私たちが導き出した一つの結論、『ハイペースで平面的なバスケットボール』を展開する上で、『最も好ましい攻撃手段がファストブレイクである』ことを考えれば、その反面、『できる限り避けたい展開は、がっぶり四つに組み合せてハーフコート・オフENSEを展開し合う』ということ … 中略 … そこで、私たちにとってファストブレイクとともに取り組むべき大きな課題が、… 中略 … セカンダリーブレイクやアーリー・オフENSEであると考え … 中略 … ハーフコート・オフENSEに移

行する一歩前の、これらのプレーやスキルや調整力を高め、より強調することによって<sup>45</sup>、バスケットボールを構築するという記述に現れています。ここにジャパン・オリジナル・バスケットボールの根幹となるコンセプトが現れていると考えられる。この最後の部分では、かなり具体的に論じているが、アップ&ダウンの激しい攻防は、ただ単に行ったり来たりすれば良いという訳ではないはずであり、そこに具体的なやり方があるはずであるが、そこには触れられていない。

### 3. まとめと今後の課題

ここまでの検討を踏まえて、再度全体の運動形式がどのように扱われ、また、どのように意識されているのか、ということを引き彫りにしていきたい。ジャパン・オリジナル・バスケットボールの構築がその中心となっていた。日本がバスケットボールで世界を目指すときにどうしても避けて通ることができない、体格差も含めた、身体能力の差の克服をどのようにするのかということです。そのために、これまでと同様に、「走力、敏捷性、スピードを最大限に活かした、平面的で、ハイペースなバスケットボール」を特徴としてきたし、また、小さくとも、組織的で変幻自在なディフェンス、オフENSEにおいては、スピーディな展開から高い成功率を誇るアウトサイド・シュートは大きな武器であり、今後も変わらず日本の基盤として、アップ&ダウンの激しい、早い展開のバスケットボールをジャパン・オリジナル・バスケットボールの中核に置いている。このことは、日本の特徴というよりも、バスケットボールの世界では、国という単位に関係なく、世界中で身体能力の低いチームを目指す一つの方向性である。そこで、さらに、その中身というか、より具体的なものを検討すると、「合理的で、効率の良い」、「スマート（賢く）で、華麗な」、そして、「頭脳的に、繊細・綿密に、そして熱心に」という

記述が並ぶ。これらのことが、ジャパン・オリジナルのより具体的な中身ということであるが、そこには本論で触れたように、具体性がないと考える。

もう一度、先の論文でも<sup>46</sup>検討した運動形式を再度確認する。運動形式は、体育概念を分析するときの重層性に検討する。重層性は、体育概念を「個別—特殊—普遍」の三つの層に分けて人間にとっての教育の意味、意義を明らかにするものである。その中で、特殊の層において、体育が教えるべきものとして、「運動形式」が出てくる。この運動形式は、「身体機能としての運動が身体機構から開放されて表象空間で操作できるシンボルへと変換された … 中略 … 『運動シンボル系』もまた、人間文化の特質である疎外態としての自律性を獲得して『累積的文化』へ変容した … 中略 … 人間運動の多様性の根源には、こうした『運動のシンボル変換』という人間文化独特の機序が大きくかかわっている」<sup>47</sup>としている。つまり、人間の身体運動がシンボル化し、それが蓄積していったものであり、なおかつそれらが積み重なったものであり、それらに支配されるというものである。その意味で、運動形式は、集団球技も人間の身体機能からシンプル化され、文化として蓄積されたものとして捉えられ、特に、集団球技の全体としての運動形式の性質を表現している。このことを踏まえて考察すると全体としての運動形式は、シンボル化されているとはいえ、より具体的な像が描けるはずである。

今回、考察の対象にしたバスケットボールにおいては、少なくとも、この具体像を指導書の中には、触れていない。そのために、バスケットボールにおいて全体の運動形式をどのように考えているのかが不明になっている。

このことをどのように捉えれば良いのか。二つのことが考えられる。一つは、日本のバスケットボールにおいて、全体の運動形式は、無意識下、もしくは、自然と生じるものとして扱われている。そのため、少なくともエンデバーに

関する上記の書物において、このことを知識として明確化する必然性はないと考えられている。二つ目は、各チームの指導者が、それぞれにおいて作り上げれば良いものであり、指導書のレベルでは触れるべきではない、触れる必要がないと考えられている。

どちらにしても、全体の運動形式を軽視していることになる。ジャパン・オリジナル・バスケットボールの構築を考えるのなら、少なくともこれらの指導書を読めば、ジャパン・オリジナル・バスケットボールがどのようなものなのか、もう少し具体的にイメージされなければならないと考える。つまり、本論の途中で触れたが、ボールオフ・マンの具体的な動きは、約束事の具体的な中身は、ということを実体化する必要があるのではないかということである。さらには、ボール運びをどのようにしたら良いのか、そこから、アーリー・オフフェンスに入るときにどのようにしたら良いのか、という具体性についても触れる必要がある。それは、「型」と呼ばれるものであるかもしれない。しかしながら、上記に示したような具体性には、触れることはなかった<sup>48</sup>。

本論のこのような結果は、少なくとも、日本においては、バスケットボールの全体像を示すような運動形式は見当たらない。もしくは、無意識下に沈んで具体的な形で認識されていないことが判明した。これは、バスケットボール型の集団球技についてもある程度言及することができるかもしれない結果である。

今後は、このことを他のバスケットボール型の種目にも検討を広げるとともに、全体の運動形式を認識することの重要性について論じていきたい。

#### 引用・参考文献

<sup>1</sup> 拙稿「集団球技における運動（運動形式）について ～集団球技におけるコミュニケーション解明の基礎として～」埼玉大学紀要（教育学部）

- 第58巻第1号 2009 pp.91-104.
- <sup>2</sup> 日本バスケットボール協会エンデバー委員会編「エンデバーのためのバスケットボールドリル～選手育成とジャパン・オリジナル実現への手引き～」ベースボール・マガジン社 (2004)  
「エンデバーのためのバスケットボールドリル2～1対1から始める5対5への基礎作り～」ベースボール・マガジン社 (2004)  
「エンデバーのためのバスケットボールドリル3」ベースボール・マガジン社 (2005)  
の三冊は、日本バスケットボール協会エンデバー委員会によって編集されている。
- <sup>3</sup> p.3. 日本バスケットボール協会エンデバー委員会編「エンデバーのためのバスケットボールドリル～選手育成とジャパン・オリジナル日本バスケットボール協会エンデバー委員会編日本バスケットボール協会エンデバー委員会編ナル実現への手引き～」ベースボール・マガジン社 2004
- <sup>4</sup> p.3. 同上書
- <sup>5</sup> p.8. 同上書
- <sup>6</sup> p.8. 同上書
- <sup>7</sup> pp.9-11. 同上書
- <sup>8</sup> p.3. 日本バスケットボール協会エンデバー委員会編「エンデバーのためのバスケットボールドリル2～1対1から始める5対5への基礎作り～」ベースボール・マガジン社 2004
- <sup>9</sup> p.4. 同上書
- <sup>10</sup> p.4. 同上書
- <sup>11</sup> pp.5-7. 同上書
- <sup>12</sup> p.4. 日本バスケットボール協会エンデバー委員会編「エンデバーのためのバスケットボールドリル3」ベースボール・マガジン社 2005
- <sup>13</sup> pp.5-7. 同上書
- <sup>14</sup> p.14. 前掲書3)
- <sup>15</sup> p.14. 同上書 バスケットボールは、ずいぶん長い間、オフエスの時間制限がありませんでした。特に、バスケットボール誕生の地であるアメリカでは、1980年代まで時間制限がなく、比較的ゆっくりとしたオフエスをするのがスタンダードでした。その当時においては、日本が実践していた素早くプレーすることが日本の特徴となっていたのです。
- <sup>16</sup> p.14. 同上書
- <sup>17</sup> p.14. 同上書
- <sup>18</sup> p.14. 同上書
- <sup>19</sup> p.15. 同上書
- <sup>20</sup> p.15. 同上書
- <sup>21</sup> p.18. 同上書
- <sup>22</sup> p.19. 同上書
- <sup>23</sup> p.19. 同上書
- <sup>24</sup> pp.20-21. 同上書
- <sup>25</sup> p.22. 同上書
- <sup>26</sup> p.23. 同上書
- <sup>27</sup> p.23. 同上書
- <sup>28</sup> p.23. 同上書
- <sup>29</sup> p.24. 同上書
- <sup>30</sup> スリー・スレットとは、シュート、パス、そして、ドリブルの三つが行いやすいボールを持った時の構えである。
- <sup>31</sup> p.26. 前掲書3)
- <sup>32</sup> p.44. 同上書
- <sup>33</sup> p.44. 同上書
- <sup>34</sup> p.80. 同上書
- <sup>35</sup> p.100. 同上書
- <sup>36</sup> p.100. 同上書
- <sup>37</sup> pp.100-101. 同上書
- <sup>38</sup> p.101. 同上書
- <sup>39</sup> p.101. 同上書
- <sup>40</sup> p.101. 同上書
- <sup>41</sup> p.10. 前掲書12)
- <sup>42</sup> p.10. 同上書 アウトナンバーとは、オフエスがディフェンスよりも多い状態のことをさす。
- <sup>43</sup> p.12. 同上書
- <sup>44</sup> p.12. 同上書
- <sup>45</sup> p.90. 同上書
- <sup>46</sup> 前掲書1)
- <sup>47</sup> p.241. 佐藤臣彦「身体教育を哲学する～体育哲学序説～」北樹出版 1993
- <sup>48</sup> もちろん、日本のこれまでのスポーツ界、学校体育制度、もしくは教育制度のなかで、「型」を避けて来たということが影響していることも考えられる。本論中にも「フォーメンションを植え付けではなく」という指摘があるが、これなどもその典型的な例である。
- (2009年3月31日提出)  
(2009年4月17日受理)